

五戸の暮らし

田舎でしごとを
継ぐ、つくる。



少し不便だから
見つけられる

「新たな暮らし」

五戸町は不便な町かもしれません。
世にいう田舎だし、町の中心部は坂が多くて大変、
それに青森県の中でも寒い地域で、
吹き抜ける冬の風は刺すような痛み……。

だけど、そんな厳しい環境を知っているからなのか、
ここに住む人はどこよりもあたたかい気がします。
一度外の世界へ出た人たちも、
幼い頃に触れた五戸のあたたかさを
思い出し、愛しくなり、戻る道を選んだのかもしれない。
そして新しい人も優しく迎えてくれます。
古い伝統を大事にしながら、新しいことにも積極的、
その懐の深さは五戸町ならではかも。

移住してきた理由はみんなそれぞれ。
共通しているのは、
良いところも不便なところも受け入れて、

この土地で生きていくことを選んだということ。
初めてきたのになぜか懐かしい町で、
新しい決断をした人たちの暮らしを
覗いてみましょう。

-contents-

「しごと」を継ぐということ

- 3 橋機工
- 5 柳沢ファニチャー
- 7 大山農園
- 9 小村歯科医院
- 11 コムラ醸造

仕事をつくる

- 13 ときの花唄
- 15 音水小屋
- 17 VIVA LA VIDA

19 「五戸のおんこちゃん」

Roots of GONOHE

- 21 デザイナー・アーティスト MILTZ
- 23 クリエイターユニット 東京ハイジ

これからの「普通」を実践する

25 金澤泰斗さん、麻美さん夫婦

27 五戸町ってこんなところ

29 五戸町の魅力

31 移住情報+オンライン移住相談 etc.

五戸町

八戸市や十和田市と隣接する町。2004年に倉石村を編入。奥州街道が通っていたため、古くは宿場町として栄えました。主要産業は農業で、コメのほか、ナガイモ等の根菜とリンゴの品種、倉石牛などが有名。その他、馬肉や青森シャモロック（鶏肉）も有名な町です。

人口/16,679人（2021年1月1日現在）
面積/177.67km²





橋機工
五戸町大字切谷内字菖蒲川下谷地 22-1
TEL 0178-68-2625 <http://www.t-kikous.com>



株式会社 橋機工 × 橋賢志さん

五戸で「しごと」を継ぐということ

1

1枚の図面をもとに 身近な機械から 航空・宇宙関連部品まで

「いずれ会社を引き継ぐつもりでしたので、工業高校へ進学し電気制御の勉強をしました」
高校を卒業後、父の会社の後継として働きますが、間もなく世の中は大きく変わりはじめます。90年代になると海外から安い外材が市場に回り、製材業は次第に減って機械の需要は少なくなっていくます。
「事業を転換しようと思っても、当初何をしたらいいか思い浮かびませんでした」と橋社長は振り返ります。
子供の頃からものを分解して組み立てたりすることが好きだったという橋さん。得意分野だった機械加工を思い立ち、旋盤などの工作機械を導入し営業に歩きます。しかし、仕事の依頼という弱みがあったか、他社が敬遠する仕事ばかり受注するようになります。
「一枚の図面から製品を作っていくのですが、当初何が難しく、何が簡単なのかも分からないまま作っていました。全て独学で、橋社長には図面を形にすればお金になるという思いしかありませんでした。」
「どんなにハードルの高い仕事でも、試行錯誤しながら完成させて納期まで届けるというのが私の信念です。ノウハウの蓄積ですよ」と橋社長は笑って話します。

多くは試作部品ですが、量産品まで対応しており、今ではカメラや電化製品の他に、半導体製造や航空・宇宙、医療機器関係部品まで手がけるようになっていきます。

航空産業に参入することになったのは、2011年に航空・宇宙関連の展示会に出展した時、兵庫県尼崎市にある企業から「航空機の仕事をしてみませんか？」と声をかけられたことからでした。その企業は航空機の脚部を製造しており、高精度の技術を持っていることが認められたのです。これを機に、翌年には航空宇宙産業が求める品質保証規格の認証を取得。

製品作りは全てコンピューターでプログラミングされ、多い時は80本もの工具を自動的に交換しながら削っていきます。

2017年には工場を建設し、ここまで事業が発展してきたのは、全ては人との出会いと挑戦、そして社員たちの熱意があったからでした。「将来的には技術をこの青森県に蓄えていきたい。これまで培った技術のノウハウを使用し、社会に役に立つものを提供していけたらと考えています」と橋さんの夢は広がっています。



「この部品、何かわかりますか？これはカメラの部品で、こっかが車の部品。これらは企業から依頼されて製造した試作品なんです」と話すのは、五戸町にある金属切削加工業(株)橋機工の社長、橋賢志さん(47)。
扱う金属はアルミや合金、チタン、ステンレスなど様々。それらの材質を複雑かつ細かな形、しかも精度の高い部品まで作っています。カメラや車、携帯電話など精密製品は、大量生産をする前に、必ず試作品が作られるのですが、同社ではその役割を担っています。さらに、H-IIロケットや航空機の部品も作っている県内で唯一の企業なのです。
創業は1983年で、賢志さんの父・(故) 橋勝志さんが製材工場のライン設備を設計、製造などを行う会社として設立。国内や海外まで順調に会社の業績は伸びていきます。



建具の技と仕事を生みだして継ぐ

かつて五戸町近隣の地域では「大工になるなら五戸にいけ」と言われたほど、五戸町には腕のいい大工が揃っていました。彼らはいつしか「五戸大工」ともよばれ、旧北海道庁なども手がけるほどの技を持っていたそうです。

町内の建造物や個人宅には、その技が随所に落とし込まれています。家の造りはもちろんのこと、障子や欄間といった建具の細工や造形がとても奥深いことにも驚かされます。「技術の高い大工が多く、要望に応えようとした建具職人のレベルも高かったと思います。時代の流れとともに求められるものは変化しましたが、ものづくりへの思いは今も変わりません」。そう話すのは柳沢ファニチャーの柳沢雄基さん（35）です。

五戸町倉石地区、木々に囲まれた場所に柳沢ファニチャーはあります。同社は建具職人だった祖父に始まり、技を受け継いだ現社長である父の和雄さんが1994年に設立した会社。柳沢さんも子供時代からものづくりが好きで、父の仕事現場にもよく付いて行ったという経験から「いずれ継ぐのだろう」というイメージを持ち、建築を学ぶために神奈川県の大工へ進みます。ところが大学卒業後に就いたのは海外ブランドのバッグを扱う都内の専門店でした。「学生時代のアルバイトで、接客業の面白さを知って小売の道を選びました。安い商品ではないので、きちんとした接客で納得してもらわないとダメ。その購入までのプロセスや人と関わるのが楽しかったですね」。新店舗の立ち上げや店長などの経験を経て27歳で五戸に戻ります。

柳沢さんは現在、専務の役割をこなしながら製作にも積極的に携わっています。掃除の行き届いた綺麗な工場内では、心地よい木の香りに包まれながら職人たちが作業に追われていました。この日、製作が進められていたのは町内の保育園に納める園児用の棚。建具は精度が命なので、必要とされるスペースにピッタリ収まらなければなりません。この精密



柳沢ファニチャー
五戸町大字倉石又重字北向沢内 7-3 TEL 0178-77-2848

さが大量生産品と職人の仕事の一番の違いです。「羽田空港や渋谷の109にもうちで手がけた什器があります。店舗や新築住宅の建具製作という仕事が多いのですが、個人のお客さんからの家具の修理もあります。建具屋は木工関係のなんでも屋です」と柳沢さんは語ります。

日々の忙しさの中で時代の移りも感じると柳沢さんは語ります。昔の新築住宅といえば和室を設けるのが一般的でしたが、今は洋式の住宅が増えて襖や障子といった建具の需要が減少しているのです。

「価格では大手に敵いません。これからは培ってきた技術は活かして仕事の幅を広げたい。例えば他業種とコラボをして、空間のトータルデザインをしたりとか、やりたいことは頭に浮かんでいます。しかもそれを五戸の中でマッチングできたら最高ですね」。より親しんでもらうために町内のイベント用にバターゴルフ台を造ってみたい、「五戸のおんこちゃん」を形どったものを試作したりとアイディアは色々。地元企業だからこそ近場で仕事を生みながら「五戸といえば柳沢ファニチャー」と呼ばれるよう頑張りたいと柳沢さんは意気込んでいます。





大山農園
五戸町大字切谷内字佐野前谷地 78-1
TEL 0178-38-6150
<http://oyama-farm.com>



大山農園 × 大山 真弘さん・絢さん

「農業」から「農事業」へと発展させていく

「作物を作って終わりじゃなく、どうすれば自分の農作物の価値を相手に伝えられるかを考えています。商談や販路開拓の時は、会社勤めを経験して良かったと実感します」

大山真弘さん（37）の実家は五戸で代々続く米農家。以前は営業マンとしてバリバリ働いていましたが、家業の継ぎ手として4年前から奥さんの絢さんと共に農業に励んでいます。営業職のスキルを今の仕事に活かす、それが大山さんの農業スタイルです。

「高校生の頃は早く五戸の外の世界を見てみたいと思ってた」と大山さん。北海道内の大学を卒業して東京へ就職。その後、北海道出身の絢さんと結婚を機に、学生時代を過ごした地で再び暮らし始めます。

その時の仕事がIT関係の営業職。数字を求められる忙しい毎日を通じつつも、連休を利用して実家の手伝いもこなしていました。「田植えと稲刈りは必須。その度に『そろそろじゃないか』と父にタイミングを相談されて……。奥さんを説得して戻ってきました。そう苦笑いを浮かべる大山さんの隣で「今は仕事の合間に子供の学校行事を見に行けるから充実してる」と絢さんは笑います。

大山農園では米と長芋の栽培を主力にしながら精米所も営んでいます。

米の作付面積は10町歩（約10ヘクタール）と近隣の農家に比べると大規模。さらに近隣の農家からも稲刈りや籾の乾燥・出荷業務を依頼されるので、収穫期は1ヶ月間フル稼働しています。「当初は『いつまで続くんだろう』と考えていました。農作業全般に言えることですが、繁忙期だけの手伝いと、年間を通してする仕事は全く別物でした」と大山さんは振り返ります。

1年目の経験があったからこそ今では、忙しい時には奥さんのママ友にお手伝いをしてもらうなど、効率的に作業を進めつつ、自分にしかできない仕事にも時間を割いています。

それが勉強と営業。例えば自分の田んぼより何倍も大規模な津軽の生産者に話を聞いたり、商談会に自分の作った作物を売り込んだり、ホームページを充実させたりと、生産者でありながら営業も積極的になします。

「どれだけ丹精をこめて作っても市場に並べば見分けがつかない。会社員時代に商品のアピールポイントを考えて販売していたので、ただ出荷するだけでは物足りなかった。味や生産者の想いを直接伝えることが価値になると思うんです」

実際、減農薬でつくられた大山農園の米と長芋は品質が高く、県内外

からの評価も上々。ふるさと納税の返礼品としても出品しており、そこを入り口にリピーターになる人も少なくありません。

「作業が一段落して、ふと将来のことを考えたとき、やりたいことが溢れてくるんですよ」と絢さん。

米は栽培していて野菜も手に入れやすい環境。町内ではブランドの青森シャモロックや馬肉、倉石牛などたくさんのお名物があるので、飲食業にも興味を持っています。どうしても発生してしまう野菜のロスなども協力して町の集いの場にしたい。自分たちにしかできない地域貢献の形を探しています。

「ゴールは絶対にはないと思っていて、思考を止めずにどんな新しい挑戦ができるかを考え続けるのが自分のポリシー。行き詰まりそうになると『あの先輩ならどう解決するだろう』と会社員時代に立ち戻るんです。これまで出会った方々の考え方に影響を受けて、物事をあきらめない自分の強みも活かして『農業』というフィールドで何が実現できるか。学び続けて一歩ずつでも歩みを止めない先に成功があると信じて日々取り組んでいます。そして、自分の積み上げたものを次世代にも繋げていきたいと思っています」



家業を継ぐことは、歴史をつなぐこと

五戸町で30年続く小村歯科医院は、親子2代で営む歯科医院です。2代目になる院長の小村圭介さん(33)は、町医者として働く父を見て、家業を継ぎたいと思ったそうです。「決意したのは高校卒業の時です。違う道へ進むことも考えましたが、長男でもありますし国家資格が必要な仕事ですから、後になって歯科医になると決めるよりはもう覚悟を決めようと思ったんです」

大学に通い歯科医師免許を取得した小村さんは、青森県立中央病院歯科口腔外科で研修医時代を過ごし、その後は盛岡の一般開業医に弟子入り、口腔外科やインプラント治療の基礎知識やスキルを学び、29歳で五戸町へと戻って来ました。14年ぶりの故郷は、他の地方自治体と同様に人口減少が進んでおり寂しい気持ちもあったそうですが、それでも五戸町で歯科医師として家業を継ぐ決意をしたのは、五戸町に対する純粋な思いがあったからです。「僕はこの五戸町に育ってもらいました。だから歯科医師となった今、一町民として家業を継ぐことでその恩返しがしたい。人口減少は確かに大きな課題ですが、それでも僕は五戸が好きです」と話します。

五戸町に戻り父と診療を行い2年半が経った頃、小村さんは診療の向き合い方について変化が生じたと言います。「歯科医師に成り立ての頃はもつと治療のレベルを上げて難しい症例をバシッと治したいとばかり思っていました。今でもその気持ちを持ち続けていますが、今診ている患者さんはほとんどが五戸町に住んでいる方です。入れ歯やインプラント治療をして感謝してくださる方はいますが、"入れ歯やインプラントに慣れて受診する方"ってまじないんですよね。だったら、この町で生きていく中で必要なことは何かと考えたら、やはり住民の方々の歯を残すことだし、そのために何ができるのかをもっと考えていこうと思うようになりました」

小村さんは町内外のイベントで講話をする機会を頂くと、歯科の知識を伝えると共に歯の大切さや痛くなる前に歯の検診を行うことの重要性を説明しています。歯科医師の仕事は一般的に歯を削って歯周病の治療をして入れ歯を作ることだと思いがちですが、それはあくまで「仕事の環であって使命ではない」と小村さんは付け加えます。「歯科医師の使命は好きな物を、好きな分だけ、

美味しく食べる日常を提供することです。ですからむし歯や歯周病を治療することも歯科医療ですが、むし歯や歯周病にしないようにすることもまた歯科医療なんです。今では早期発見・早期治療・定期検診の考え方が定着しつつありますが、メインテナンスという概念を父はいち早く持っていました。僕の思う医療のルーツは父親の背中だったのかもしれないですね」と少し照れながら話してくれました。

2代で続くことは患者さんにとっても恩恵が多く、治療歴(カルテ)が残るのもそのひとつ。父が治療した患者さんを、小村さんが引き継ぐことで今までの治療がわかるのはかなりつけ歯科医としても重要です。

父の医院を継承する中で小村さんは父の作った歯科医院を「舟」と例えたのも印象的でした。「ここには父が診療した患者さんと父と一緒に育ってきたスタッフがいます。家業を継ぐということは父の作った舟の舵取りを引き継ぐことだと思っています。ですからこの舟を転覆させないよう父への感謝や尊敬の気持ちは忘れてはいけませんし、その覚悟や責任も持たなくてはなりません。日常臨床の中で見習うこともあれば

時には意見が分かれてディスカッションをすることもあります。でも親子だからできる話しもあります。僕はもともと意見を溜めずにズバズバという性格でもありますが、歯科医師として大先輩の父に思いつきりぶつかることも楽しんでいきます」とにこやかに話す小村さん。

自分の父親と同じ職業を選択すること、五戸町に帰ってきて家業を引き継ぐことを選択した人はおそらく一度は葛藤があったはずと話す小村さん。しかし家業という五戸町の歴史をつないでいるのはこのような熱意を持った若いエネルギーなんだと感じました。歯科医師として、五戸町の住民として、小村さんは今日も一人一人の患者さんに真摯に向き合い診療を行っています。



小村歯科医院
五戸町字熊ノ沢 25-13
TEL 0178-62-5121



ました。先のことを見越して考え、発想し、行動できる父を尊敬しています。そんな父を見習っていきたいです」と語る小村さん。

現在、製造しているなんばんみそは、スタンダードな甘口、辛口の他に山椒タイプ、青森県が推奨する「できるだし」とのコラボなどがあります。さらに、十和田青果の「十和田美人ごんぼ」を使った商品や、全国的にも有名な牛たん専門店「牛たん炭焼利久」の付け合わせ商品など、コラボ商品も幅広く手がけています。

このように新商品に挑戦しているのは、コムラ醸造の経営方針のひとつにある「長年続いている伝統を守りつつ、日々変わっていく時代のニーズに合わせた商品作りをする」というところにあります。明治から今日まで続く食品はとても珍しく、それだけ地域の方々に親しまれてきた味であると言えます。

「だからこそ、この味を守っていくことはとても大きい責務です。これを守り抜くためにも時代のニーズに合わせたコラボ商品などを含めた商品作りも共に大切に考えています」と小村さんは語ります。

商品開発には一切手を抜かず、最高の味を目指して取り組んで生み出



コムラ醸造株式会社
五戸町銀杏木 13-5
TEL 0178-62-7333
<http://www.komurajouzou.com>

した商品の数々。それは父を目標に努力してきた結果でもあります。小村さんは今後、父の引退までに会社の基盤を作り上げ、15年後に向けて、会社の方向性を新たに形にしていこうと目標に日々努力しています。

また、小村さんの活動は会社だけに限らず、現在は五戸町商工会青年部としてイベントの運営やまちづくり活動にも積極的に参加しています。

「今、五戸町をなんとかしようという動きが出てきています。それが町の好きなのところ。自分が町にどんな形で貢献できるか、色々と考えていますよ」。二児の父でもある小村さんは、自分の子どもたちの将来も見据えながら、毎日を大切に過ごしています。子供たち世代に誇れる地元にしたい、そう願う若手がいる町の未来は明るく輝いています。



五戸で「しごと」を継ぐということ

5

コムラ醸造株式会社 × 小村 卓至さん
味を守るために新たな味を生む

冷蔵技術が発展していない頃、冬場でも野菜を食べられる方法が生み出されてきました。明治時代より県南地方で親しまれてきた「なんばんみそ」もまた、そんな保存食の一つです。五戸町に伝わるなんばんみそは、大根、人参、ごぼう、胡瓜、しその実などの野菜を数ミリ角で切り、醤油の元となる醃（もろみ）に漬けて込んで作る漬け物です。炊き立てのご飯に添えて食べると、なんとも癖になる味です。地元を出た人々にとっても、懐かしいふるさとの味として人気です。

コムラ醸造株式会社は1885年に創業しました。同社の作る「元祖コムラのなんばんみそ」は看板商品として、今なお多くの人々に愛されています。

その看板商品を活用したコラボ商品を生み出すなど、新たな取組に挑戦し続けているのが、同社の常務取締役、小村卓至さん（32）です。小村さんは地元の高校を卒業後、東京農業大学で食品関係の勉強に励みました。卒業後は、福島県の商品会社で3年間修行をした後、25歳で五戸町に戻り、現在は同社の担い手として、会社を支えています。

「社長である父の背中を見て育ってき

五戸で
仕事を
つくる

01

高山恵里子さん

古民家を利用した民泊—ときの花唄—

旅には一人旅、二人旅、家族旅、グループ旅と様々な形があります。そして、近年新しい宿泊形態として注目されてきているのが、低価格で気軽に泊まれるという民泊です。

五戸町中心部から車で約10分、八戸市からだと十和田湖へ向かう沿線上の静かな田園風景に囲まれた場所に民泊「ときの花唄」があります。開業は2019年8月で、オーナーの高山恵里子さん（33）は、山形県からUターンし、地域おこし協力隊の一員だった人です。

五戸町に生まれ育った高山さんは、山形の美術大学を卒業後、県内へ就職。暮らすうちにふる里五戸を懐かしく思い出すようになっていきます。「子供の頃、母方の祖父がよく山へ山菜採りに連れて行ってくれたものでした。山菜採りや山での遊びを通して地域の豊かさを教えてくれていたように思います」。結婚をして子供を育てるなら、豊かな自然環境に包まれた五戸で、と考えていた高山さん。

町なんです」

それを実感したことがあります。それは「古民家で飾る五戸の雛人形」というイベントを思い立ち開催した時、ものづくりをしている人がたくさんいることを知ったのです。これをきっかけに3年目からは有志らが街の空き店舗を利用して、手作りの作品を販売する店を開設することにつながっていきます。

「その時、私たち協力隊というのは、地域にあるものを掘り起こし、形を変えて有効活用する『場』を提供していくのが自分たちの役割なんだと思います」

もう一つ協力隊で残したのは、小渡平公園で毎月開かれるフリーマーケット「月イチビクニックマーケット」。「まわって、めぐって、つながって」をコンセプトに女性移住者3人で「メツナサンド」のグループを結成し行っているものです。現在は場所をふるさとの家に移し、不定期で開催しています。

高山さんは3年間という協力隊の役割を終えた30歳の時に結婚。子供が生まれた時、これからのことを夫と相談して思い立ったのが民泊でした。現在住んでいる家は築約50年の古民家で、Uターンしてすぐに気に



①玄関から左手奥が12.5畳の宿泊和室となっている。②組子細工が施された障子。本格的床の間のある和室はとても居心地が良い。③自家製野菜を使ってピザを作る予定だというピザ窯。

民泊 ときの花唄
五戸町大字切谷内字上葛蒲川 1-6
メール：tokinohanauta.info@gmail.com
LINE：右記QRコードから友達追加してください。
※冬季休業中、詳しくはお問い合わせを。



そうしたある日、五戸町で地域おこし協力隊を募集していることを知ります。「帰れるチャンス」だと思い早速応募したところ、幸いにも採用となり、Uターンしたのが27歳の時でした。

「何かをやりたいと思ったらすぐ始められ、形にできる可能性が高い地で、しかも人との結びつきが強いというのが町のイメージでした」と高山さんは振り返ります。

自分なりの視点で町の良さを発信したいと思った高山さんは、町のパンフレットやグリーンツーリズムの年間計画表を作成するところからのスタートでした。また、地域のひととできるだけ繋がりを持つことにも心がけたと言います。

「毎日が新鮮な気持ちでした。初めて南部菱刺しや五戸大工のことも知りましたし、五戸大工が手掛けた昔の建物を見た時は感動でした。五戸町というのは、ものづくりの町で、何でも手作りする風土が根付いている

入って借りた住まいです。

「もともと旅行が好きで、以前、野宿覚悟で自転車旅をしたことがありました。旅先で宿の女将さんの優しさで、ちょっとした気遣いですっかりその町が好きになってしまったという経験があったんです。いつかは自分もそういう宿をやってみたいと心の片隅で思っていました」と高山さん。

4人まで宿泊ができる和室は、技巧を凝らした組子細工が施された障子に、床柱にエンジュを使用した床の間で、高山さんが一目惚れしてしまったという部屋です。

宿泊客の多くは東京や名古屋、大阪などからバイクでの旅行者ですが、民泊を始めた最初のお客さんは、東京で民宿経営をしているご夫婦で、様々なアドバイスをしてくれたことが忘れられないと言います。

「外国人の利用者も増えてきたら、子供が英語を話せるようになるかもしれないと、淡い期待を持っているんですよ」と高山さんは子供をあやしながら明るく快活に笑います。

様々な価値観や体験を持った人に出会える場で、畑を耕しながら豊かな自然環境で子供を育てていきたいというのが高山さんの想いなのです。

五戸で
仕事を
つくる

02

佐藤

岳広さん
美穂子さん

誰かの居場所になれるようにー音水小屋ー

五戸町倉石地区にある「音水小屋」は、2016年に移住してきた佐藤岳広さん（39）と美穂子さん（38）、子供たちの家族5人で営む農家民宿です。いつも賑やかな声が響く家には、県外から地域の人までたくさんの方が集っています。

「名前の由来は、ここの屋号『おとみず』から取りました。地元の人ですら漢字が分からなかったたので、自分たちで考えたんです」

オープンしたのは2019年8月。美穂子さんは約10年前から農家民宿とカフェの構想があったそうです。

大阪府出身の美穂子さんは、学生時代ボランティア活動に積極的に参加し、さまざまな経験をしました。なかでも中国の農村地域で暮らした1年半が、美穂子さんの意識を大きく変えたのです。

「立場とか出身地とか関係なく、『みほこ』という一人の人間として接してくれたんです。いろんなしがらみから開放されたことが、私にとって救いになったし、みんなで囲む食卓

り、虫を取りにいたり、畑で遊んだりと五戸町には楽しい思い出しかないんです」と岳広さん。さっそく先輩移住者へ会いに行き、農業の研修生としてノウハウを学ぶことに。家のお風呂が壊れていたため、近所の温泉に通っていました。その流れで美穂子さんは温泉で働きながら、農家民宿の構想を持ち続けていましたが、妊娠出産が続いたこともあり、なかなか進めることができない状況でした。

しかし、その夢は岳広さんが腰を壊したことで一気に現実の話になったのです。

「かがむ姿勢が多い農作業で腰を痛め、約2ヶ月寝たきりになってしまったんです。それを機にお風呂を直し、負担が減るようにと家のリフォームもスタートさせました」

水回りから始まり、厩をリビング・ダイニングに、2階は宿泊者用の部屋に大きくリフォーム。施工を依頼した工務店は、昔ながらの製法を大事にし、梁や階段の木も再利用。黒くなった梁は、古いながらもしっかりと家を支え、当時の大工仕事の丁寧さを伝えてくれています。

10年間思い描いていた美穂子さんの願の農家民宿がついに完成。さっ



①近隣にある木をふんだんに使った音水小屋。杉、松、ひのき、栗などが使われ、あたたかみのある家になった。黒い梁が味わい深い。②坂を登った先にある畑まで元気いっぱい駆け上がる子供たち。ハサミを使っ
ての収穫もパッチリで、大事な戦力だ。③階段脇にある寄せ書きは、訪れた学生や家族のもの。ひとつひとつが大切な思い出だ。

農家民宿 音水小屋
五戸町倉石又重上工平 16-2 1泊2食付き / 1人7千円
問い合わせ：090-2796-9974 (小学生半額・未就学児無料)



が本当に楽しかった。自分の居場所を与えられたのが嬉しかったんです。その後も何か迷ったり悩んだりした時に美穂子さんの心の支えとなったのが、「場所」でした。自分もいろんな人を受け入れるような居場所を作りたいと強く思うようになったのです。

「私の周りにも自然農をやっている先

輩とか友人が多かったたので、農業への興味はずっとありました。なので夫の考えには最初から賛同していましたね」

長男と次男を授かり、次男が6ヶ月の時に、マンション契約のタイミングで五戸町へと移住。住居は祖父母が住んでいた家に入り、畑もそのまま受け継ぎました。「小さい頃から祖父にトラクターで乗せてもらった

そく関東や関西の高校から要請があり、既に何組かの宿泊者が訪れています。初めて経験する収穫体験や、新鮮な野菜の美味しさに驚いている様子を見て、佐藤さん夫婦も初心を思い出すといいます。家族での参加者や、地域の人たちが立ち寄る場所にもなっているそうで、これこそ美穂子さんが理想としているものでした。

「大好きなカフェやゆっくり本を読む場所が五戸になくて、少しホームシックになっていたんです。でも、それなら自分で作ってしまえ！と思って」と笑う美穂子さん。同年の冬には、気軽に立ち寄れるカフェも始めました。

「移住とか農業に興味があっても不安はたくさんあると思うんです。そういう人たちがうちで体験をして、それを通して参考にしてもらえたら嬉しいなと思っています。そんな場所になりたいですね」

子供たちの元気な声や、友達、地元の人でいつも賑やかな音水小屋。どんな時代でも人と人がつながることが、地域を元気にしてくれます。

五戸で
仕事を
つくる

03

村越武さん
ちあきさん

町に楽しい居場所を — VIVA LA VIDA —

五戸らしい坂のある小さな通りにある日本家屋。日中はさんと太陽に照らされ、日が暮れると温かな光があふれます。中は色とりどりの南米雑貨が並ぶ落ち着いた空間で、キッチンからはスパイシーな香りが漂います。そして店の奥に進むと鏡とスタイリングチェア。『VIVA LA VIDA』は、美容室でありながら、メキシコ料理を中心とした料理店でもあります。

この店を営むのは村越武さん(34)・ちあきさん(40)夫妻。「二人ができることを一緒にやりたい」と、この店を開きました。

メキシコ生まれの武さんは5歳の時、父の地元・五戸町に家族とともに移住します。その後は五戸町で育ち、美容師として八戸市で働き始めます。その一方で、夜はバーで働き始めます。副収入のためにお客さんの前に立っていました。次第にやりがいを感じ、「いずれは人と会話ができる店を持てたら」と考えるよう



になります。

八戸市出身のちあきさんも元々は美容師で、武さんは同じ美容室の後輩でした。「履歴書を見たら『メキシコ』って書いて、ビックリしました」とちあきさん。以前から南米雑貨が好きだったので、二人が仲良くなるきっかけとなったそうです。

結婚後、好きなことをかたちに生活していきたいと、一緒にお店を開くことを考え始めます。良い物件がなかなか見つからずに8年ほどが過ぎたある時、出会ったのが五戸町内にある古民家。「八戸市内のほうが、お客さんが来るんじゃないか」という不安を抱いていましたが、「星がすぐきれいだし、子供は五戸で育てたい!」というちあきさんの強い気持ちから、お店は五戸町で開くことに決めました。

二人の心配をよそに、五戸の人たちはとてもあたたかく迎え入れてくれました。近くで焼鳥屋を営むご主人からは「新しい店を開いてくれて

ありがとう。この辺が賑わって嬉しい」と、予想していなかった感謝の言葉をかけられます。また、20〜30代の人からは、「近場に入りやすいお店ができて嬉しい」という声。そういった言葉をかけられる度に「五戸で良かった」と武さんは実感するそう。武さん自身も、「若者同士で気軽に入れるお店が、歩いて行ける所にあればいいのに」ということを、昔から抱いていたのです。美容室を併設し、週末は夜遅くまで営業しつつ、時には音楽イベント等を催すのもそんな思いからです。

一方のちあきさんは「五戸で非日常を提供したい」とキッチンに立ちます。料理の先生は、お義母さんのマリアさん。メキシコを訪れた時は、現地に住む親戚たちからもレシビを教わりました。

ここで提供しているのはメキシコの日常食です。中でもトルティーヤは、メキシコ人にとって欠かせないもので、これが不味いと料理すべてが不味くなるといわれるほど。OKをもらうまで何度も練習しました。思いを込めて作られたトルティーヤは、ランチタイムの看板商品。好きな具材を包んで口に運べば、しっかりとした食感と一緒に、トルティー



①トルティーヤは焼き立ての食感を保つため、専用のカゴに入れて提供。好きな具材を包んだら、ライムを絞って食べるのが本場のスタイル。②飲食スペースの奥にサロン。内装は五戸内外で活躍している「laula」の三浦さんが手がけた。③「初めて来た時は寒くてビックリした」と話すマリアさん(右)。レシビを伝授したり、店が忙しい時は孫の面倒をみたりと、陰ながら支えている。



VIVA LA VIDA
五戸町字下タノ沢 7-7
TEL:0178-79-7604
営業時間:11:30 ~ 16:00
(金土曜のみ夜も営業)
定休日:日、月曜日

ヤの材料であるトウモロコシの味がふんわり広がります。また、店内にディスプレイされた南米雑貨たちも、ちあきさんのこだわりのひとつ。日本家屋の落ち着いた華やかさのバランスを考えながら、リラックスできる空間を創り出しています。「お客さんにくつろいでほしいと思ってるけど、この空間を一番楽しんでは自分かも。元気になるような派手な色使いが、南米雑貨のすきなところ」とちあきさんは笑います。

自分たちにとっても、五戸の人たちにとっても、楽しく居心地の良い場所に。そんな思いで、2人は今日もお店に立っています。

Roots of GONOHE

五戸の中で暮らす人がいる一方で、町から羽ばたいていった人たちもいます。年代やバックグラウンドは様々ですが、共通しているのは「なにもない町だな」と若い頃に感じていたこと。そして大人になった今、同じく共通して感じているのが「田舎に生まれて良かった」ということ。住む場所は違えど、培ったスキルを活かして五戸を外から支えてくれる2人をご紹介します。



五戸の おんこちゃん

五戸町のシンボルツリーは「おんこ（イチイ）の木」。五戸町にはおんこの木の精、のような「おんこちゃん」がいます。いつもニコニコ笑顔でおんこの実のような赤いほっぺがとってもチャarming！ 今度も五戸町のどこかをお散歩しているかも…。



五戸町のPRキャラクター

おんこちゃん

おんこちゃん
グッズもあるよ！

おんこの木の精といわれている、五戸町のPRキャラクター。普段は穏やかな表情をしているが、おいしいものを目の前にすると、目をカーッと見開いて、野生を解き放つ！ いつも坂の付近で姿を消すらしい。おんこちゃんをみかけた人には幸せが訪れる。

おんこちゃんの絵本
「せーんべせんべ」
もあるよ！



MILTZ (ミルツ) さん

<https://miltz.myportfolio.com/>

1988年生まれ。幼少期は埼玉県や八戸市で暮らし、小学2年から高校卒業までを五戸町で過ごす。上京後は専門学校に通いグラフィックデザイナーに。独立後アーティスト方向への転身のために作品を描き貯めている。祖母からトウモロコシをもらう際に「キミけ」と詛る一時に五戸人であることを感じるそう。

MILTZさんに聞きたい アートのこと

「学生時代からグラフィティというストリートアートが好きでした。海外の地下鉄などに描かれている落書きです。それと漢字を組み合わせたような作品を作っています。」

そう話すのはグラフィックデザイナーであり、アーティストとしても活動するMILTZさん。その手が生む作品は英語の筆記体のようなスタイリッシュさもありながら、漢字のような重厚感もあり不思議と和を感じさせます。文字のように見えますが読むのは困難。ただ、色合いや線に込められた力加減を感じてみると、「こういう意味なんじゃないか」と、なんとなく伝わるメッセージ性があります。

MILTZさんが漢字をモチーフにした作品を創り始めたのは2016

年。都内の専門学校を卒業し数年間にはデザイン会社に務めます。数年後にフリーランスになるとデザイナーとして、パンフレットやロゴ制作など、企業や個人から依頼されるデザインの仕事を主体にこなしてきました。ところがそれらの案件に「自分らしさ」を表現できないジレンマを感じ始めました。自らが進む道と作風に悩んでいた時、たまたま書展覧に足を運びます。

「展示された書は字が崩れてあつたり漢文が書いていたりするので読めない意味もわからないのですが、フォルムや墨のかすれから感じる意味を超越したかっこよさや美しさなどに心を奪われました。その時に漢字のフォルムとストリートアートを掛け合わせるアイデアが生まれました。」

今ではMILTZさんの作風に惹かれたクライアントからの依頼も入るようになり、CDジャケットやファッションブランドへのグラフィック提供、パッケージデザイン等「らしさ」を出せる仕事も少しずつ増えていきます。

「かつていいと思える作品を作り続けていればいつか売れると根拠のない自信だけはあるんですよ。生活費に困ったら居酒屋でアルバイトでもするかなど失敗した時のことを楽観的に想像しています。なかなかならない時でもどうにかなる、このポジティブさは五戸での日々と上京したことによる環境の変化から身についたと思います」とMILTZさん。

小学2年から高校卒業までを五戸で過ごしたMILTZさん。エンタメが少ない町だからこそ、面白さや楽しさは自分で見つけ出すしかありませんでした。18歳でその環境を飛び出し、デザインの道を歩んで約15年。いまでは田舎で過ごした日々も悪くないと思えるようになったそう。

「結局、都会に住んでも自分が面白いと思えることは作り続けることでした。ですがそのことに気付き信じて続けられたのは、上京を経験できた田舎生まれの特権だと思います。五戸はたくましさや気ままだを培ってくれた大切な場所です」。

Roots of GONOHE

漢字のもつ「力」をアートする。



LINE005-190103 (2019)

神社仏閣を参拝した印として貼られる千社札とストリートに無造作に貼られるステッカーをモチーフにした作品。



東京ハイジ/ ササキトモコさん、ササキワカバさん

ササキ姉妹によるクリエイターユニット。曲や脚本は姉のトモコさんが、キャラクターデザインやアニメーションは妹のワカバさんが担当。大人からの押しつけではなく、子どもたちが本当に楽しめる作品を目指し、書籍やCD、動画のほか、自治体や企業とのコラボなど、多岐にわたって活動している。

幼い頃からものづくりが好きだったふたり。弟を含めた3人での遊びといえど何かをつくること。絵を描いたりぬいぐるみをつくったり、オリジナルのラジオ番組を考えたり。また、母親がボランティアで絵本の読み聞かせをしていたので、絵本への愛は人よりも強いものでした。

「知らないうちに仕事になっていったので遊びの延長という感じ。子どもも受けたいという思いもありなく、自分たちが一番に楽しむのが創作の原動力です。姉も私も大人になりきれてないんでしょね」とワカバさん。

そんな中、故郷を思い返すきっかけになったのがおんこちゃんの創作でした。大人になって五戸を見つめ直すと、住んでいた頃とさほど変わっていない印象を受けたそうです。「子どもたちが素直なもの、風景もそのまま。特に青森の自然は濃いなと感じています。美しくもあり神秘的でもあって、幼い頃からこんな自然が身近にあったのは幸せなことなんだなって。この自然に触れていたからこそ、おんこちゃんも生まれたんだと思います」

ほのぼのとしたキャラクター達と、優しいリズムが耳に馴染む歌詞、そして見た後に気持ちのほのり温かくなるストーリー。「五戸のおんこちゃん」の生みの親でもある「東京ハイジ」は、企業やテレビ番組のキャラクターデザイン、アニメーション等を数多く手掛けている姉妹ユニットです。ふたりが創造する作品はどれも、子供には身近なことの楽しさを教えてくれて、大人には、何かを思い出させてくれる、そんな魅力を感じます。

トモコさん、
ワカバさんに聞きたい
ものづくりと五戸のこと

「ただ昔は何もない田舎が嫌で早く出たかった。東京ハイジという名前も都会へのコンプレックスから名付けたんです」とふたり。まずは姉のトモコさんが一足先に上京。大手ゲーム会社に就職して作曲などを担当します。妹のワカバさんは大学を卒業すると岩手県で就職。トモコさんから仕入れる東京話に思いが膨らみ、あてもないまま24歳で上京します。

東京ハイジとして活動し始めたのもこの頃でした。トモコさんは作曲を、ワカバさんはデザインを中心にそれぞれ仕事を抱えていて、東京ハイジという名での活動は、単なる趣味でしかありませんでしたが、YouTubeに投稿した「はみがきのうた」がヒット。すると、ふたりで仕事が舞い込むようになります。「知らないうちに仕事になっていったので遊びの延長という感じ。子どもも受けたいという思いもありなく、自分たちが一番に楽しむのが創作の原動力です。姉も私も大人になりきれてないんでしょね」とワカバさん。

Roots of GONOHE

子どもが素直に楽しめる作品を生む。



上／五戸のおんこちゃんは2018年にデビュー。2021年には絵本も出版された。左／東京ハイジの代表作といえば「はみがきのうた」。この歌のおかげで自分で歯磨きができるようになった子もいるんだとか。右／東京ハイジのアイコンも愛くるしさと素朴さが特徴。中央のリングに青森を感じる。

これからの「普通」を 実践する

新しい生活様式が模索されている昨今、居住地を問わない働き方が注目を集めています。2020年にはテレワークが普及しましたが、それよりも前から五戸で新たなスタイルを実践しているのが金澤泰斗さんです。東京の会社に属しながら故郷の五戸で、奥さんと3人の子どもたち、両親と共に過ごす暮らしを訪ねてみました。



五戸町のニンニク農家の次男として生まれた金澤泰斗さん（32）。サッカー漬けの子供時代を過ごし、進学を期に五戸町を離れます。

進学先の関東の大学を卒業後、選んだ道は中古車関係の営業職でした。入社した先は中古車業界最大の企業。全国各地を転々としながら営業マンとして実績を積み、採用担当として人事を任せられ、高級車ディーラーの店長まで経験します。

「成果をあげるというよりも、商品を通して普段では会えない人と出会えることがやりがいでしたね」と金澤さん。同郷の麻美さんと結婚したのもこの頃。子宝にも恵まれて、公私ともに充実した日々を東京で送っていました。

転機が訪れたのは2017年のことでした。家族一同が実家に集まった際、父が「家業はどうするんだ」と口火を切ります。

「それまでは兄が継ぐと思ってました。でも相談をしてみると『今すぐは難しい』という話をされて。じゃあ僕が帰って農家を継ごうと思ったんです。いずれは帰ることになると考えてたので、子どもたちのためにも決断は早いほうがいいと思って」。

2人目の子どもを授かったタイミングも重なり、人生の選択を迫られていた時期。タレントとして活動する麻美さんも、撮影等で家を空けることがあり、お互いの実家のある五戸であれば、子育てをしながら仕事を続けられると判断。

県外で働いている場合、実家に戻る＝退職する、という考えはまだまだ一般的なかもしれません。仕事にやりがいを感じていた金澤さんも退職を考えていましたが、上司に相談したところ提案されたのがテレワークでした。

「会社にも所属しながら、地域にも貢献する人材や働き方があっていいんじゃないかと。ただ会社としても前例がなく、どうやって動くかは自分で考える必要があったので、4回のプレゼンを経て納得してもらいました。この環境を作ってくれた会社とスタッフ、繋がりが続いているお客様には感謝しかないです」と金澤さんは話します。

こうして家族と共に2019年7月から五戸で暮らし始めている金澤さん。現在の職場は自宅敷地内にある小屋の一室。子どもを保育園に送り届けたら髪型と服装を整え、午前9時か

ら業務にあたります。金澤さんが任されているのはカーシェアリングに関する新規事業。現地にいるスタッフをサポートしつつ、電話やメールで営業もこなす主任的な役割です。東京のオフィスの様子は、画面とスピーカーを通してリアルタイムで把握できるので、リモートといえどデスクの一角にいるような感覚。離れていて不便に感じることはほとんどないそうです。「しいて言えば飲み会くらいですね。自分だけがリモートなので少しさみしい」と苦笑いを浮かべる金澤さん。それでも仕事終わりにすぐ子どもたちと会える喜びはかけがえのないものです。

今の所は本業が立て込んでいて、家の仕事はニンニクの収穫ぐらいしか手伝えないとのこと。それでも今の仕事環境に慣れてきたら、地域の活動にも積極的に参加していきたいと金澤さんは思いを膨らまします。「仕事を家に持ち帰っているのではなく、新たにできる仕事を創造しながら、地元に貢献することが大事だと思います。それがどんな形なのかは模索中ですが、今の暮らしを選んで良かったと思っています」

自宅オフィスにて仕事をする金澤さん。音声と画面は常に接続したままなので、現地にいるスタッフも気軽に金澤さんに話しかけます。



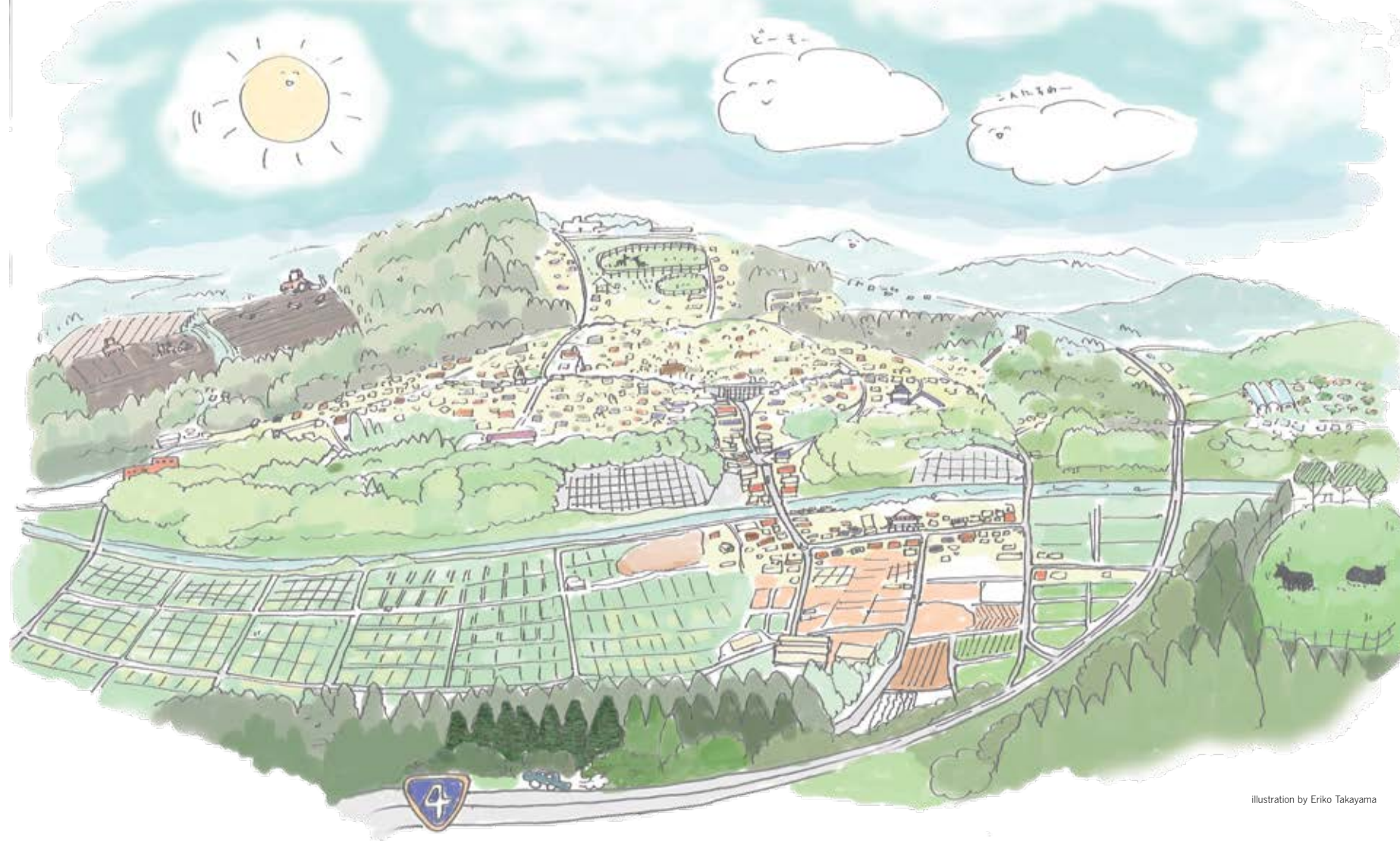


illustration by Eriko Takayama

五戸町ってどんなところ

気候

豪雪地帯までいきませんが、冬は雪も降りますし、寒いですが！夏には冷たいヤマセが吹くこともあり、時には農作物に影響をおよぼすことも。しかし、気温の寒暖差が少なく、涼しい夏を迎えられる利点も！災害もほとんどありません。

祭・イベント

8月に行われる「五戸まつり」や「産業まつり」、「ハロウィンイベント」や冬のイルミネーションなど年間を通してイベントは豊富です。

人口 約 16,679 人 (2021 年 1 月 1 日現在)

総面積 177.67 km² (東京ドーム 約 3700 個分)

PR キャラクター

五戸町のシンボルツリー「おんこの木」の精のようなもの、おんこちゃんはお子供に大人気の PR キャラクターです。



© TOKIOHEIDI / Gansho Town

子育て

子育てのことについて支援してくれる「ここっと」が町役場内にあります。子育てに関する情報提供や予防接種のスケジュールなど、利用者に寄り添ったアドバイスやプランを作成してくれます。妊娠から育児まで、困ったことを気軽に相談できる強い味方です。

八戸市や十和田市と隣接する町。平成 16 年に倉石村を編入。奥州街道が通っていたため、古くは宿場町として栄えました。山間に位置し、平らな道は少なく坂が多いのが特徴です。主要産業は農業でコメのほか、ナガイモ等の根菜と紅玉（リンゴの品種）、倉石牛、青森シャモロックなどが有名です。その他、桜肉（馬肉）とサッカーが盛んなことでも知られています。

まだまだたくさん！

五戸町の魅力

このへ三大肉



肉もおいしい五戸町。特産として愛される「馬肉」、とろけるような味わいと霜降りが特徴のブランド牛「倉石牛」、そして比内地鶏や名古屋コーチンと肩を並べるほど評価の高い「青森シャモロック」。この3つの肉が五戸を代表する「このへ三大肉」です。それぞれの肉は、町内10店以上の飲食店で堪能することができます。

なんばんみそ



大根、ニンジン、シソの実などを細かく刻んで唐辛子と醗（もろみ）に漬け込んだピリリと辛い漬物です。五戸の家庭には、冷蔵庫にたいていこれが入っていると…。

五戸の地酒



五戸町は銘酒の地ともいわれ、2つの酒蔵があります。五戸川の伏流水や質の良いお米、独特の気候が美味しいお酒を生み出します。

五戸町図書館



およそ10万冊以上の蔵書がある大きな図書館です。木でできた館内は落ち着いた雰囲気、入口を入ってすぐ絵本などの児童書があり、子ども達が遊べるスペースも。中央には、DVDなどの視聴覚コーナーがあったり、畳の座敷スペースまで完備されています。

五戸まきば温泉

昭和51年にオープンし、平成18年に宿泊施設と露天風呂がつくられました。温泉にゆったり浸って日頃の疲れを癒やせるオアシスの温泉です。



check!! サッカーへの情熱が熱い！



「サッカーのことになると、特に熱くなる」という五戸の人達。海はないがビーチサッカーチームもあり、東北で唯一のサンドコートをつくったほど。過去にはJリーグチームの合宿地として誘致するなど、サッカーに対する情熱はすごいんです。

check!! 生活費が安い！

都会に比べると、生活費は少なくてすみません。中でも驚くのは食費。高いお金を出さなくてもおいしい素材が揃っているし、お隣さんが野菜をおすそ分けしてくれるなど、田舎ならではの喜びがあります。ただ、冬の暖房代は都会よりも少し高いかも。

check!! 農業が盛ん！



米はもちろん、ナガイモやニンニク、りんご、大豆、そばなどの雑穀もつくられています。就農を考えて移住する若者も増えていて、まだまだ広がりを見せそうです。

check!! 坂道のある風景が素敵！



高台に開けた町なので、いくつも坂があり、眺めが良い通りや風情のある通りが至る所にあります。坂にはそれぞれ八幡坂、四ツ谷坂、堀合坂、八景坂など名前がついています。坂が多い地形からか、足腰の強いお年寄りが多いとも言われています。

五戸に行ってみよう

五戸に興味を持ったなら、訪れてみることをオススメします。雰囲気を感じて、自分に合った町が見極めたうえで考えてみましょう。

1. 交通手段を調べる



五戸町に行くなら新幹線か飛行機、時間に余裕があるなら高速バスで青森県を目指します。町には電車が通っていないので、降り立った駅や空港でレンタカーを借りるのがオススメです。冬は雪の影響を受けるので、ゆったりとした「田舎時間」でプランを立ててみましょう。

五戸までの道のり一例

・飛行機＋車＝約3時間10分
東京（羽田）
→青森空港（約1時間30分）
→五戸町（約1時間40分）

・新幹線＋車＝約3時間10分
東京駅
→八戸駅（2時間45分～3時間）
→五戸町（約20分）

その他、八戸と五戸を結ぶ路線バスも運行しています。用途に合わせてプランを立ててみましょう。

2. まちを散策してみる



着いたなら早速、町の中を散策してみましょう。坂が多いので足元はスニーカーがベストかもしれません。名所を巡ったり、気になる店で名物を舌鼓をうったり、小さな町ですが意外にも見どころは豊富。まちあるきガイドを利用すれば知識が深まります。

五戸まちあるき
五戸町観光協会 0178-62-7155

3. 泊ってみる



宿泊すれば雰囲気をもっと感じられること間違いなし。便利な八戸市に泊まるのもいいですが、五戸まきば温泉に泊まって馬肉を堪能するもよし。あるいは本誌で紹介した「ときの花唄」や「音水小屋」に泊まれば、移住した先輩方のアドバイスも受けられます。泊まって食べて、就農を目指しているなら農作業も体験して、移住体験をしてみましょう。

移住サポート

住む土地を変えるのは勇気がいること。町では相談会や補助を通して、人生の大きな決断をサポートしています。

住宅について

子育て世代がアパート等を借りて町に居住する場合、月額最大200000円の家賃補助が出ます。

【条件】

- ①夫婦のいずれかが満18歳以上満40歳未満の若者夫婦世帯であること。
- ②家賃補助の受給終了後も、2年以上継続して町内に定住を確約できること。
- ③五戸町に住所を有し、町内の民間賃貸住宅に居住していること...などなど。

就農について

青年就農ステップアップ支援事業というものがあります。支援金を最長3年間（1年目：60万円、2年目：30万円、3年目：18万円（夫婦の場合は1.5倍の額）交付しています。

条件としては、独立・自営就農時の年齢が50歳未満、かつ、経営開始後8年以内の認定新規就農者または認定農業者等。

町には若い農家の方と交流する場があるので、初心者の方でも安心して就農できます。五戸はグリーンツーリズムも盛んなので、実際に農作業を体験して雰囲気を生で感じてみましょう。

空き家バンク制度

町内の空き家を所有されている方に、物件情報を登録していただき、空き家の利用を希望される方へ情報提供を行う制度です。登録物件情報については、役場総合政策課で確認することができます。利用希望者は要件を満たす必要があります。詳しくは末尾に記載の連絡先にお問い合わせ下さい。

五戸町の未来を創る起業支援事業

五戸町に移住し起業する方や、町内での需要にこたえるために新しくビジネスを始める方に、起業を応援する支援金を交付します。金額は基本30万円、移住者の場合は20万円加算、町内空き家活用で50万円加算で、最大100万円です。

オンライン移住相談

五戸町への移住（インターン・リターン等）を考えている方へ対してのオンライン移住相談を受け付けています。

五戸町役場職員が対応しますが、実際に移住した方も交えて、生の声を聞くことも可能です。

【相談日時】

月曜日～金曜日（土日・祝日は応相談）

午前9時～午後9時 ※1回あたりの相談時間は30分程度

【相談方法】

Web会議サービスオンライン相談

※お持ちのスマートフォンまたはWebカメラ・マイク等が使用できるパソコンの準備が必要です。

【予約】

メール（sousei@town.gonoh.aomori.jp）に必要事項を記載し、希望日の2日前までにお申し込みください。

- ①氏名、②年齢、③メールアドレス、④電話番号、⑤相談希望の日時（第3希望まで）、⑥相談したい内容、⑦出身地（市区町村）、現住所（市区町村）、⑧行政職員の他に相談してみたい人（移住者）等がいる場合、どのような人の話が聞きたいか。

記載したのはほんの一例です。疑問等があれば、気軽に相談してみして下さい。

五戸町総合政策課 移住・定住担当
電話：0178-6217952

表紙の作者 石橋洋一さん



青森県五戸町在住の 86 歳。定年退職後、海外旅行で見た光景に感化され、版画を始めました。題材にするものは様々ですが、最も思いを込めているのが生まれ育った五戸の風景。今の景色を見ながら、無くなった景色を思い出して故郷を彫り綴ります。その創作意欲は衰えることがなく、最近では「五戸のおんこちゃん」を町の景色に重ねた作品を生み出しています。

五戸町役場

2021 年 1 月 初版第 1 刷発行

〒039-1513

青森県三戸郡五戸町古館 21-1

TEL 0178-62-2111（代表） FAX 0178-62-6317

URL <http://www.town.gonohe.aomori.jp>